

*なお、以下の記事はドラフトであることをお断りいたします

私のゼミ

上智大学 吉田研作

今回、私の英語科教育法の授業を紹介しよう。この授業は、主に、学生の模擬授業と教え方についてのディスカッションからなっている。週 2 回、秋学期に開講している授業だが、毎年 40 名から 50 名の受講者がいる。上智大学の場合、文学部の英語科教育法は、英文学科の教員が中心に教えているが、その他の学科の学生は、英語学科が開講している授業を受講することが多い。英語学科では、英語科教育法 I,II,III,IV (各 2 単位) と私の英語科教育法 (4 単位) を開講している。私の授業以外は、週 1 回の半期授業である。

私の授業は、英語科教育法と言っても、かなり変わった授業である。なぜなら、学生は、英語を教えないからである。例えば、2007 年度は、10 グループ (1 グループ 4 から 5 人) が模擬授業を行ったが、扱った言語は、韓国語、フィリピン語、マレー語、インドネシア語、琉球語、ポルトガル語、ドイツ語、アメリカ手話、イタリア語、そしてハワイ語だった。何語を教えるかは、各グループが決めるが、第 2 外国語として比較的多くの学生が学んでいるイスパニア語とフランス語は除外した。

私の授業の目的は、知らない言語を学ぶ生徒の気持ちになって授業を受けることにより、教え方の善し悪しについて考えることにある。従って、学生がみんな良く知っている英語、あるいは、比較的多くの学生がとっている第 2 外国語は目標言語として選ぶことができないのである。

ところで、英語を教えない英語科教育法なんてあるのか、という疑問があるかもしれない。実は、学生たちは、上記の各言語を「英語で」教えるのである。クラスルーム外国語については、できるだけ目標言語のものを、しかし、ティーチャートークは英語で行うように指導している。勿論、タスク等で複雑な指示が必要な場合は日本語で行ってもかまわない。

学生たちは、週 2 回模擬授業をする。一回の模擬授業は 60 分で、残り 30 分を模擬授業についてのディスカッションとリアクション・ペーパー作成に充てている。ディスカッションは、授業内容や教え方についての質疑応答と自由に意見を述べ合う場になっている。その後で書くリアクション・ペーパーは、授業担当者に渡す。授業担当者は、1 回目の授業に対するリアクション・ペーパーを基に、2 回目の授業をする (内容的には 1 回目の授業の続き)。2 回目の授業についてのリアクション・ペーパーは、学期末に提出させるレッスン・プラン作成の参考にする。なお、リアクション・ペーパーは、最後にはすべて私が集め、内容をチェックした上で、出欠に使っている。

学生たちの模擬授業の前に、私が数回英語教育、特に、コミュニケーション・アプローチについて講義をしている。また、具体的な教え方の指導として、Display 活動と Referential 活動の例を示し、模擬授業が単なる Display 活動のみにならないよう、必ず Referential 活動を入れるよう指導している。また、学習指導要領で求められている内容についても講義をしている。

学生たちは、数週間かけて、自分たちにとっても初めて学ぶ外国語の教え方について考え、模擬授業の準備をするが、その間、私は授業の後の時間を使ってそれぞれのグループの準備の指導をしている。なお、実際の模擬授業の際には、私も参加して生徒になるので、あてられることが良くある。しかし、学生と一緒にペア・ワークやグループ・ワークをするのは、結構楽しいものである。時には、間違えて恥をかくこともあれば、逆にうまくできたときは「学生先生」から賞品をもらうこともある。

また、休みが入り、きりが悪い時は、私が教え方についてのデモンストレーションをしたり、講義をしている。毎年どこかで入れているのは、音楽やリズムを使った教え方（Jazz Chants や歌）だが、今年度は、中央教育審議会の答申と新学習指導要領についての講義も行った。

学生の評価は、模擬授業、リアクション・ペーパー、出席、グループ毎に提出させるレッスン・プラン、そして、各自が書くレポートを基につけている。グループ毎のレッスン・プランは、それぞれのグループが担当した模擬授業を「もう一度やるとしたら」どうしたいか、というテーマで、ディスカッションやリアクション・ペーパーを参考に作成、各自が書くレポートは、日本の英語教育について自由に書かせている。

このような授業を行う中で気付いたこととして以下のことをあげておく。

1) 英語ができるからと言って英語のティーチャー・トークができるとは限らない。学生の中には、帰国子女もいるが、英語がいかにもうまくても、英語で授業を運営したり、内容を説明するのは難しい、ということを学生自身が気づいてくれていることが、ディスカッションやリアクション・ペーパー等でわかる。

2) たとえ初級の最初の授業でも、Referential 活動を入れることは可能だ、ということをもとの発表でも実現してくれている。初級では、まだ communicative なタスクなどは入れられない、という間違った考え（構造シラバスを使っている人）があるが、そんなことはない、ということを学生たちが示してくれている。

3) 知らない言語を学ぶことの楽しさを学生たちが体験している。学期中に習った新しい言語のちょっとした表現を学生たちは、結構覚えており、知らない言語を学ぶことへの自信が付いているようである。

なお、この授業は、私が学生に「負ける」ようになるまで、老化防止のためにも続けようと思っている。今年で還暦を迎えるが、まだ数年は行けそうな気がする。